令和４年度 第４回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】令和４年９月６日（火）
午後１時 30 分～午後３時
【会場】ラ・ホール富士

１　出席者

発言者：富士市において様々な分野で活躍中の方
４名（男性２名、女性２名）

２　発言意見

番号	分野	項　　目	頁
発言者１	製造業、市民活動	新しい地域コミュニティとまちづくり	4
2	地方創生、ＩＣＴ推進	コワーキングスペースによる新しい働き方の創出	7
3	性の多様性	ＬＧＢＴ当事者の現状と支援	13
4	自然環境、教育	自然環境教育を通した地域への愛着醸成	19
質問者１	―	若者の県外流出の防止	26

【川勝知事】　一言御礼の挨拶を申し上げたく存じます。

この「平太さんと語ろう」というふうに言っておりますけれども、これは広聴会でございまして、富士市の方でご推薦賜りました４人の方々からも広くお話を承りまして、それを県政に活かしていくと。そういう目的で今回77回目を迎えておりますが、もう少し早く来たかったんですけれども、コロナのために今日になりました。

この会は実は今日お聞きして、場合によっては要望があったりお尋ねがあったりする場合があります。その場合は、ここで答えることができないこともあるかも知れません。その場合は、それを聞きっぱなしにしないで必ず本庁に持って帰りましてお答えするというのが確立しております。

私は昨日から富士市に入っており、昨日は小林製作所に参りまして、街のほとんど中心地に実に立派な工場がございまして、ここは紙の街ですから、今は新しい時代を開く、プラスチックに代わるあるいは鉄に代わるＣＮＦというものがありますけれども、そうしたものをフルで活用しているところでありますと同時に、ノーベル賞を受賞されました吉野彰先生、リチウムイオン電池ですが、リチウムイオン電池とはこのマイナス極とプラス極を間でセパレートしないといけないのですが、その膜を作っている最高の、いわば世界に冠たる会社が小林製作所であるということも、昨日実地を見て社長さんと技術者のトップの方から直々に現場を見ながら感じ入った次第でございます。

今朝は一番に、小長井市長さんのリーダーシップで自転車を市政の軸の一つに置かれておりますけれども、レバンテフジ静岡のサイクリングステーションに参りまして、レバンテフジ静岡の選手もいまして、実に素晴らしい２階建てのステーションができあがって、そして２階でいろんな方が訓練できる、遊べる、そしてまたレバンテフジ静岡の選手と交流できるというスペースも用意されておりまして、ものすごく良いものができているなと。

太平洋岸自転車道から500メートルのところですから。太平洋岸自転車道というのは、和歌山と千葉を結んで、静岡県だけで400数十キロありますから、そのナショナルサイクルルートでありますが、ひょっとすると富士山一周ということになれば、太平洋岸自転車道とリンクするというふうに思います。

その先に実は市長さんもご一緒してくださいまして、こちらで今年の３月に自転車レースが行われて、１万数千人の方がものすごい熱気に包まれたと。だけれども私は知りませんでした。ですから、おそらく来年度もこれはもう少し広い形でやられるのではな

いかと思って楽しみにしております。

それから岩松小学校に参りまして、あそこはなんと岩松北小学校と２つに分かれて、要するに人口が増えて小学校が２つに分かれた訳ですね。あそこの精神はかりがねなんですよ。「かりがね魂」と書いてあったんです。かりがねというのはいうまでもなく、富士川の「かりがね堤」でございまして、そしてこれは地元の県議の皆様方、また市長さん、市民の皆様方の強い要望によって、新々富士川橋と言っていたのが、生まれ変わって「富士川かりがね橋」になるということが決まりましたね。数千人の方から応募があってそこから選ばれたもので、そのすぐ近くにあるのが岩松小学校ということで、これほどに強くかりがねの伝統がこちらに生き様として、祖先に対する敬意として受け継がれているということが分かった次第でございます。そうしたことを見ながら、今日は実はこちらのＷＯＲＸ富士の方も見せていただきました。

そして一つ、10日ほど前に文部科学大臣に呼ばれまして、そこにはＷｅｂで中国の文科大臣、それから韓国の文科大臣がいらっしゃって、各国において一つだけ文化の中心の自治体を選ぶということで静岡県が選ばれました。東アジア文化都市といわれるものですが、これは元々1985年にヨーロッパがＥＵになりまして、通貨も一つになり、議会も一つになったと。そこで何で皆の心を一つにしようかということで、文化首都という運動を始めた訳です。あそこは国民国家を克服してＥＵという共同体になりましたので、文化首都はそれぞれ順番にアテネ、あるいはアムステルダムなどというふうにしたと。それを東アジアでも活用しようということになって、東アジアはまだ共同体ができていないものですから各国で一つということになって、東アジア文化都市と言っておりますけれども、来年は東アジア文化都市の日本の代表、言い換えると日本の文化首都に静岡県がなります。

私は、これは日本の代表で文化といえば世界文化遺産の富士山がありますから、そういう意味で富士山絡みでいろいろなものができるかと思いますけれども、一年だけですが日本を代表する文化の首都になると。文化にはスポーツ文化も入っておりますから。

ですから演劇や音楽、あるいは映画やファッションや、または芸能や食文化、そしてスポーツ文化も入れて来年度は非常に大きな意味を静岡県は持つと。そして、こちらは駅伝も富士宮市さんとご一緒に今年10周年で、陸連の方たちが「ここまでやってくれてありがとう」と。「もう箱根と並ぶようになりましたね」なんて言われて、非常に感動した次第でございますが、こちらは女子駅伝、あちらは男子駅伝ということでございま

して、いろいろな追い風がこちらに吹いているなというふうに感じているところであります。そうした中で今日は４人の代表の方たちにお話を承りまして、これを県政に活かして参りたいというふうに思っているところでございます。何卒よろしくお願いを申し上げます。ありがとうございます。

【発言者１】よろしくお願いいたします。

先ほどご紹介いただいたんですけれども、簡単に自己紹介をさせていただきながら、私が思っていることだとか、この後どういうふうにしていきたいかといった話をしていきたいと思います。

実は少し前に、ある大学の教授からよそ者という話を伺いました。ここに書いてある通り、私自身は生まれてから大学までずっと九州で過ごしまして、その後2005年に富士市にある自動車部品メーカーのジヤトコに就職したことを機に、この街に住むことになりました。そして富士山に登ってみたいとか、近くのスポットに行ってみたいとか、それから地域の歴史的な建物や出来事だとか、そういったことに興味を抱くようになったということになります。これは元々この街で育って来ていない私だから、よそ者だからこそ感じるような視点なのかもしれないというふうに思っています。よく市民の皆さんと話をすると「富士山は登るものじゃないよ。見るもんだよ。」とおっしゃる方もいますけれども、私は来た瞬間に登りたいなと思いました。今日は、今の私がこの富士市で様々な活動に参加する中で、いろいろな方と出会ったり、いろいろなことに参加する中で街づくりにはまってきたことだとか、そこにはまるまでに至った転機になった出来事を紹介しながら、その中から今私が感じている課題や、それに対してどのようにアクションをしていこうと思っているということを話をしていきたいなというふうに思っていますので、短い時間ですがどうぞよろしくお願いいたします。

まず転機について、これから三つ話をしていきたいと思います。

まず一つ目ですけれども、私は富士市の自動車部品メーカーのジヤトコに勤めているのですが、私自身は理系出身で工学系の大学なので就職からずっと開発の業務に携わっていました。その中でやはり自分自身の視野をもっともっと広げたいなという思いがあって、会社の中で自ら手を挙げて、広報の部署へ異動しました。ちょうど、異動直後くらいに会社が社会貢献に本格的に力を入れ始めるということが起きました。決してそれまで何もやっていなかったということではなくて、もっともっと地域を大事にしようね

という取り組みの一環の中で力を入れようということになったということです。その中で、2016年の９月から富士市のシティプロモーション課と一緒にやらせていただいているのですが、富士山クリーンルート３７７６という、この街にある登山ルート３７７６を０メートルから山頂の３７７６まで清掃しながら登ろうというプロジェクトに参加しました。ちょうど１年かけて全６回に分けて、山頂までやったということです。

実は、このプロジェクトは今もずっと続いておりまして、一昨日の９月４日に再び山頂まで行って参りまして、今日僕は全身筋肉痛で足も痛いですが、頑張って話をしております。これが一つ目の転機です。

続きまして、二つ目が2018年７月から「働くみんなの静岡おしゃべりナイト」ということを（会場内のスライドに）書かせていただいてます。いわゆる異業種懇談会みたいなものになるんですが、ここには結構若手の人たちが集まっています。20代とか30代とか。そこで、実際にいわゆる企業の先頭に立って、いろんなことをやられているような方たちが集まっているような会で、そこで自分と同世代や、自分よりもっと若い世代の人たちが結構いろんなことにチャレンジしたいとか世の中に貢献したいとか、もしくは地域のために頑張っているとか頑張ろうとしている姿を目の当たりにします。それを目の当たりにすることで自分自身のエネルギーをもらえますし、自分も何かやらないといけないなと、そんな感覚に襲われました。

次が転機の三つ目です。

2020年の１月からですけれども、私が所属している市民団体になりますけれども、一般社団法人F-designというところになります。先ほど説明した2016年に富士山に一緒に登った仲間が立ち上げた団体になっておりまして、「富士山が微笑み、みんなが関わりたくなる“まちづくり”」ということを基本理念に街づくりに励んでおります。この街は後ろを向けば富士山があるじゃないですか。富士山が後押ししてくれないようなことはやるべきじゃないなと思っていて、逆に言うと富士山がきちんと笑って見てくれているようなことであれば、きっと多分この街のためにもなるし、世の中のためになるだろうということで、そういうことにどんどんチャレンジしていこうぜということでやってます。行政の皆様ともいろいろとやらせていただいておりまして、富士青春市民ミーティングというものにもここ３年くらい携わらせていただいているんですけれども、ちょうどコロナで世の中がストップした時期に、行政の皆様とともに街のキーマンの一つである、まちづくり協議会の代表の方たちを対象に、いわゆるオンラインに接続するって

どんなことだろう、みたいなことをやってみたんですよ。当時コロナが始まったばっかりで、オンラインがこんなに加速的に進むということは皆思っていなかったし、結構できない人が沢山いたんですけれども、要は時代の流れに乗っていかないと街づくり自体がストップしますよね、みたいな中で、うまくストップさせずに進めることに何とか注力できないかなということで取り組みました。ただ単にオンラインができても面白くないので、地元の高校生などとマッチングして、若者が考えるまちづくりの課題って何だろうみたいな地域の課題を議論させると何か新しいことが生まれるんじゃないかみたいなことをこの富士青春市民ミーティングの中で行ってみたりしました。

これらの転機を経まして、私が今感じていることを次にお話しします。

例えば、いわゆる地域の中に「なんとか町」とか「なんとか自治体」みたいなものが沢山あって、そこはすごく活性化されたコミュニティだったんだと思っているんです。だけれども、やっぱりなかなか地域コミュニティ自体が時代の流れとともに希薄化したりとか、新しい世代がそこに入ってきたり、世代交代が起きたりして、その地域の繋がりとか結束だとか一体感とかそういったものが、段々薄れてきているのではないかなというふうに思っていて、例えば、先日自分がいる町内での地域の体育祭一つとっても、参加者を集めるだけで非常に苦労したんです。そのような状況が起きているというふうに思っていますので、このコミュニティは非常に大事だと思っていて、自分にとって心地よい場所みたいなものがあることによって、その人自身が充実した生活を送れるとか、いきいきといろんなことに取り組める場になると思っています。なのでそういう地域コミュニティというものを無くさない、もしくはそういうところに参画していくといったことが非常に大事じゃないかなと思ってます。特に若い世代は、本当になかなかどこにも属さないで仕事と家庭だけやってます。みたいなことが結構増えてきてると思うのですが、もっともっといろいろ出ていけるようなことができるといいなと思っています。そして、先人の知恵やノウハウも非常に大事だと思ってるので、これまでの地域コミュニティに代わる新しいものだけじゃなくて、今の地域コミュニティが進化した形といった、何か変わるものと進化したものの２つの両輪が重なって、サードプレイスみたいなものになり皆の生活がいきいきとしたらいいなと考えています。

これまで私が言ったように、そういったサードプレイスになるような地域コミュニティというのがこの街にも沢山あるんです。私自身もF-designに所属していますし、登壇されている皆さんも、それぞれそういう団体に入られていると思うのですが、そうい

う場所があるのですが、この街にどれだけのものがあって、どんな方向性を見ててみたいなことを結構皆さん知らなくて、それは非常にもったいないなと思っているので、そこを自分がハブになってではないですが、いろんな団体とも繋がりを持つ中で、皆さんが活躍できる場所を提供できたらいいなと思っています。

もう一つは、街のサステナビリティだとかを考えた場合に、この街自身も少子高齢化で、さらにいうと若者もこの街で育ったけれど外に出ていくといったことが起きていると思うのですが、そんなのでは駄目だと思っていて、若者に選ばれる街にしていかないといけないなと思っています。この街も捨てたものじゃないなぁと思ってもらえるようにしたいと思っているので、これはやはり私が所属しているF-designの活動の中でも、新規事業として若者がやってみたいということを後押しできるようなことに取り組みたいなと思っていてプロジェクトを立ち上げようとしています。なのでこういう活動自体を県や市やいろんなところからサポートをいただきながら街を盛り上げるといったことを、それから若者に選ばれるような街にしていくということを後押しいただけると嬉しいなと思っております。

以上で終わります。

【発言者２】まずはこの度、このような貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。

私たち株式会社ＪＯＩＮＸは、先月の８月に三期目に入った会社になります。コロナ禍のテレワークで会社を立ち上げて事業をここまで進めて参りました。市内の方では、「ＷＯＲＸ富士」というコワーキングスペースを運営させていただいており、「みらいてらす」というところも元吉原の幼稚園を使わせていただいて、こちらもコワーキングスペースを運営しております。

そこでは富士市に合う新しい働き方の創出というところで力を入れて参りました。富士市が令和２年度にデジタル変革宣言をされて、その中でテレワーク先進都市を実現するということで、私たちも新しい働き方・生活様式というところを２年間試行錯誤しながらチャレンジして参りました。

コワーキングスペースのオープン当初というのは、本当に１日で数えるほどしか人が来なかったりとか、日によってはゼロということもありました。そこでは、やはりどのようにコワーキングスペースを使っていけばいいんだとか、まず場所の認知だったりと

いうところにすごく時間を割き、オープン以降、毎月交流会というのを欠かさずに18回行って参りました。

こちら交流会だったり、イベント、教室を開催した時の写真になります。交流会に関しては、当初より平均して大体10名から15名、多い時には25名を超える参加者の方にご参加いただきました。当初、大体９割ほどが男性の方のご参加だったんですけれども、最近は女性の方々も参加してくださる方が増えて、実際に交流会に参加したことによって首都圏だったりとか、海外への販路というところを進めているというお声をいただいて、とても嬉しく思っております。

毎回の参加者の傾向としては、半数が富士市以外の方にも参加いただいており、近隣の市の方だったりだとか、また首都圏の方々にも多くご参加いただいております。こちらも本当に嬉しい反面、この富士というところで交流会というものの必要性だったりとか、認知の難しさというところが今も課題でチャレンジしているというところでございます。

それから毎年イベントだったりセミナー、マルシェというところを開催させていただく中で、実際に今お店の方がオープンし始めて１年半ほどになるんですけれども、大体４千人近くの方々に、ご来店いただけるようになりました。正直、富士市における新しい働き方という点で私たちにこの明確なものが今まだ見えているという訳ではないんですが、今年２つ動き出したものがあります。

一つ目が富士このみスタイル推進協議会、通称「このみ会」というものの発足ということになります。元々、富士このみスタイルということで、富士市に移住してきた方々だったり、これから移住する方を応援する事業があり、主に女性の方々が自分に合った働き方を見つけて活動されております。その中から今年度はさらに柔軟な働き方だったり、人と人との繋がりをキーワードに、仲間と仕事をシェアするというワークシェアの普及を図ることで移住希望者の増加、若い世代の増加、それから子育て世代の女性の活躍の後押し、子育てと仕事の両立によるワークライフバランスの確保、それから企業様とのパートナーシップによる経済の好循環の実現というところを目指しております。ちょうど、昨日も「このみ会」の定例会というのもあったんですけども、この夏にワーカーさんの方を募集させていただいて、最初創業メンバーというのが８名いらっしゃったんですけれども、昨日新たに７名の女性の移住者の方が入会されました。

現在スキルがある方も、これから学びたいという方々も、皆さんと情報交換をしたり

だとか、現状の共有をし合うことで私たちも含めてとてもいい刺激になっております。そして今年度発足以降、すごくありがたいことに、様々な問い合わせをいただいております。例えば、ＥＣサイトへの掲載の写真の撮影であったりとか、ライティング、ランディングページ制作、デザイン、チラシデザインであったり、マーケット調査だったり、あと企業様への取材というお仕事もいただいております。

そしてもう一つが、学生による事業部の方を７月に弊社の中で発足させていただきました。現在、大学４年生が３名ほど弊社の方に在籍しており、その子たちの共通点が地域課題への関心の高さということを感じているところです。学生の目線でいうところであったり、学生だからできることを大事にしながら、地域課題への参画や企業様とのワークシェアに取り組ませていただいております。

まずは第一歩として、富士市さんの方で事業をされている「まちなかラボ」という商店街活性の事業があるんですけども、そちらに地域の食材を使わせていただいて、ハンバーガーショップ兼学生が集まるコミュニティというところで参画させていただいて、学生の集まる場づくりというのを行っていきたいと思っております。様々な学生のやってみたいというものを実際に実現する場所として活動していきたいと思っております。

そして、昨年度までは企業様やフリーランスの方々へのアプローチをＪＯＩＮＸとしてしてきたのですが、この二つの、「このみ会」や学生の事業部が動き出したことによって、今までになかった新たな視点だったり、課題が見えてきました。移住された方や女性だったり、子育て世代のニーズに合わせた働き方、大学がない富士市でできる学生の活躍する場所などがコワーキングスペースを通じて生まれてきております。面白いアイデアや取り組みをしている方に沢山お会いさせていただきました。

今、富士市をフィールドに私たちが様々なことにチャレンジさせていただいておりますので、今後も多くの人たちが新しいものや、やってみたいことが実現できる場が沢山あったらいいなと思っております。ありがとうございます。

【川勝知事】　非常に新しい時代の波を感じるような二人のご発言であったと思いますが、まず発言者１さんは2005年にこちらに来られたと。今おいくつですか。

【発言者１】　41です。

【川勝知事】　だからこちらに17年いることになるんですね。ですから最初の３つぐらいは、記憶がないから、ですからその半分は、少年時代は九州で、そしてこちらジヤト

コに来られてから富士に来られてということでこの街が発言者１さんを作ったということですね。富士山を見て変わったんですね。

そして、なぜこれがこの街の人にとって当たり前なんだということで、このおそらく最初の感覚が富士山に登ると。みんなで登ると。０メートルから登ると。そういうふうに繋がって、仲間ができて、そしてジヤトコの広報に入っておられる訳ですから、ジヤトコの社員として、広報がいわば発言者１さんご自身がジヤトコの社員としての広報になっている訳ですね。同時にジヤトコのしていることは、発言者１さんのしていることというふうに取られますから、社会貢献としてはすごくジヤトコのためになっていると。けれどもご本人は、もっと地域のためになりたい、若者のためになりたいと、こうお考えになっておられています。自転車のハブというか中心になりたいと。それをサードプレイスといわれているのですが、要するに富士山に向かって恥ずかしくないこと、あるいは富士山がいいと言ってくれるならばやりたいと言ってることですから、文字通りこれは中心ですよね。

だからジヤトコの殻をもう破っている訳ですね。それで破っていることを許せるような時代になっていると同時にジヤトコもそれを許していると。ですからこの発言者１さんのような地域に貢献をしながら、また地域のコミュニティの重要さを肌で感じながら、新しい時代に応じたこの地域の中心性と、地域に根ざしているけれども、それを超えた存在になれるじゃないかということで。ですから、あなたの運命は四十にして惑わずです。どうもジヤトコの枠をはみ出して何か新しいことをやり出すのではないかというような、ただしこれは生活をしないといけないし、いろいろと責任も伴うかと思いますけれども、そういう新しい時代を切り拓くそのロールモデルをあなたは自ら実践されているんだなと、そういう実感を持ちまして。是非、市の理解もある、会社の理解もある地域のコミュニティもあると。ですから沢山の輪もできあがっているということで、これがどういう形で大化けして行くのかなと楽しみにしていきたいというふうに思います。

発言者２さんの話もそれと似ていますね。最後は学生も出てきましたから、結局若者、それで新しい働き方で、しかもまた女性の知恵を出し合って、一つは「みらいてらす」ですか。先ほどＷＯＲＸ富士の方は短い時間でしたけれども、今日見せていただきまして、非常に堅牢な建物なんですね。入口から入って、反対側のところになんといいますか、ゆっくりと座れるチェアが置いてあって、その向こうは富士山なんですよ。ですから、すごくいい場所なんです。そして、ワンフロアのところにも自由に使えるように机

が配置されておりまして、これは大部屋なんですけれども、２階に行くとこれは集中して勉強できる、あるいは例えば司法試験だとか受験勉強だとかそういう時に１日1000円、１か月で5,500円から使える。そして、コーヒーとか飲料が飲めるところがあり、飲み放題ということです。私２階に行ったら、様々な部屋がございます。その中で女性の方が集中して仕事をされておりました。おそらくテレワークですね。それから一番奥の部屋には防音装置があって、一つの劇場みたいになっておりまして、ここは音楽のレッスンに使われているとおっしゃいましたけれども、２階の空間が作られている訳です。そこから見られるようになっていますから、これはいろいろなイベントに使えるなと思いましたね。それからまた堅牢なコンクリートの柱がある訳ですけれど、所々アクセントのある家具が置いてある訳です。ですから洒落ているんですよ。ここに今人々が来始めていると。

そうした中でテレワーク、これは先ほど発言者２さんが、市長さんがデジタル都市の宣言をされたと。これを励みとしてやり始めたとおっしゃったので、これは行政のリーダーシップと民間のレスポンスがちょうどうまくいっているんですね。実は今朝、市長さんご自身から地場の産業を支援するセンター、それからテレワークをする場所を今図書館の分館の１階と２階にそれが備えられているんですけれども、これがこちらの職員さんが東京の県庁の事務所に行かれて、コニカミノルタの向こうに行って自分たちの技術と人材が、それが富士市のやっていることとまったく一緒だということで、その青年が市の方に連絡したら、それではすぐ呼んでくるということになって、向こうのトップがこちらに事務所を構えることになって、実質移ってきて、ここはいけると思ったらしいですね。

ところが市長さん、また幹部の話に聞くと大体これからテレワークは100人のうち20人ぐらいはもうこういう時代だと分かっていると。80人くらいの人たちは直接ものづくりをやっているからテレワークじゃなかろうというような抵抗勢力になっているらしいです。しかし、さすがに市長さんや幹部の方々です。ものづくりといってもいろいろな事務的な仕事がありますから、これはテレワークができるはずだと。そういうことで、それに対する相談体制ができあがっているんですね。それは既存のそういう中小企業の方たちのいわゆる古い体質的なものに今、壁にぶち当たっている。ところが一方で発言者２さんのように新しい時代に応じた形で何ができるかチャレンジしている人がいる訳ですよ。そして学生が入ってきたというのが大きいです。学生は卒業してから仕事を

するのではなくて、学生が社会人と一緒に知恵を出し合って、いろんな人とここで新結合をして、新しい事業を起こしていく可能性をＷＯＲＸ富士から感じますね。そういうことがあそこで、いろいろと付加して、そしてそこから育っていくと。それで行政がそれを後押ししていますからね。

それからお母さん方、あるいは若い女性は結婚した時に子どものことがありますから心配な訳ですが、実際今静岡県への移住者2020年度、過去最高で、1,398名でした。その81.7%は30代前後です。つまり子育て中の方たちが来てらっしゃるんです。当然いろいろと不安でしょう。お母さん同士のネットワークが必要です。そして子どものことや自分たちの生活のことを心配でしょうから、そういう時にコワーキングスペースが明らかに役に立つというふうに思います。

それから実は去年2021年度は移住者過去最高をさらに塗り替えまして、1,398名が1,868名になった訳です。500名弱伸びた訳です。これも83%以上が30代前後なんですよ。ですから、こういうお二人くらいの世代の人が東部に移り来てる訳ですね。私どもはその方たちがテレワークをしやすいように、例えばスペースを作りたい場合、40万円ほどを出しますよと、そういう援助を200件にいたしましたところ、あっという間に切れまして、実は補正を組んで、さらにその数を増やそうと。だけれども、そういうハードだけでなくて、デジタルで、テレワークでこれから仕事をしていくそういう時代になると。

今日岩松小学校の方に行ったら、小学校３年生にタブレットを配っている訳です。そして４年生の教室に行って入ってもいいと先生がおっしゃってくださったので、子どもと話して（知事が）「難しい？」と聞くと、（子どもが）「ううん、簡単だよ」と。どれくらい操作を覚えるまでにかかったかを聞くと、一週間くらいと言っていました。だから子どもは３年生で支給されて１か月もたたないうちにそれをマスターしてしまうんですね。それをマスターした少年少女たちがこれから社会に出てくる訳ですね。

ですから大人が追いつくのも大変かもしれませんけれども、静岡の中でデジタル都市宣言を行って、いろいろと相談窓口を設けられて、図書館という一番人々が行きやすいところに１階と２階がございますが、２階に行ったら中小企業のための相談がありまして、パッと気がついたら雑音がしているんですよ。これはデリケートな話が聞こえないように特許の話ですとか聞こえないように、ヤマハがやっているサウンドマスキングといいまして、音が聞こえないような、しかしそう言われないとちょっと扇風機が回っているのかなというぐらいの、あるいはエアコンがちょっとやかましいかなくらいの程度

なんですね。そういうものもちゃんと備えてですね、個人の秘密を守りながら相談を受け付けると。大体一日に１件のペースで来ているということが先ほど分かったんですけれども。ですからそういう若者がどんどん入れますと。それから既存の中小企業の方に新しい時代の流れを感じていただいて、行政がそれを後押ししていただければ、ここから変わっていく可能性がありますね。

スポーツもそうです。それから来年は文化首都です。こういう若い男女があの場所を提供して、またイベント、ソフト、一方ハードを提供しながら一緒にやっていると。しかもこの二人は今日初めて会ったと言うんですよ。これからこの２人が組めば、１＋１は３になると思いますね。よろしくお願いします。期待したいと思います。ありがとうございました。

【発言者３】 Ｒａｉｎｂｏｗ ＤｏｏＲ しずおかという団体で共同代表をしております、発言者３と言います。予定では代表のＡ君がこの会議に参加をさせていただく予定になっていました。ぎりぎりまで参加を予定してたんですけれども、どうしても体調が戻らないということで、ただせっかくそういう活動を紹介させてもらえる機会だということで、担当の皆様からアドバイスをいただきまして、今日代わりに報告をさせていただきます。よろしくお願いします。

（場内表示のスライドを見ながら）本人が作ったため自己紹介になっていますけれども、代表のＡ君なんですが、富士宮出身なんですが、94年生まれの今28歳です。それで、ＬＧＢＴという言葉は結構一般的になってきているとは思うんですけれども、トランスジェンダーというふうになると思います。生まれた時は女の子、女性として生まれたんですけれども、この後ちょっと紹介しますけれども、自分の性別についての違和感が小学生ぐらいの時から段々あったと。2012年に戸籍上の名前変更をしました。18歳の時に名前を今の名前に変えました。そして20歳の時、2014年に性別適合手術をタイで受けてきまして、戸籍上の性別を女性から男性に変更をしたというふうになります。今の法律では、生殖機能を取るというのが条件になっているものですから、本人は子宮と卵巣を摘出をして、戸籍を男性に変えたというふうになっています。トランスジェンダーの当事者は手術をするしないの選択というのは人それぞれなんです。健康な体にメスを入れる訳ですから、彼も女性から子宮卵巣を取ったことによって男性ホルモンを一生打ち続けなきゃいけないというリスクを承知のうえで、それでもやっぱり戸籍を変えたいとい

うので、そういうふうな選択をしました。残念ながら今の法律ではそういう条件がついているということです。そして、2016年Ｒａｉｎｂｏｗ ＤｏｏＲ しずおかという団体を一緒に設立をして今に至っています。

本人の了解をもらったものですから、ライフヒストリーを写真で簡単に紹介をします。３人兄弟でお兄ちゃんと妹がいて、（スライドの）右側にトイレの仕方と書いてありますけれども、子どもの時からお兄ちゃんを真似して立っておしっこをしていたということで、よくそれを母親に叱られていたというのが本人のうっすらとした記憶だそうです。小学校に入った時に赤いランドセルを買ってもらったんだけれども、どうしてもやっぱりしっくり来なくて、お兄ちゃんが小学校を卒業した時と同時に、自分のランドセルをわざと石で壊して、お兄ちゃんのお古を仕方ないから使うという形で、黒いランドセルで小学校４年生からは通っていたというふうに本人は言ってました。そして、同じようにお兄ちゃんに憧れて野球を始めたんだけれども、当時野球というのは男の子のスポーツなんだからというふうに言われたけれども、ずっとどうしても野球をやりたかった。（スライドの）一番右は小学校４年か５年くらいだと思いますけど、この頃から小学校の中で男女（おとこおんな）というふうにからかわれていたということですが、本人は望んでこういう服装をしていたと本人が言ってました。

高学年になるとやっぱりいろんな活動をして（写真は）ソフトボールなんですけれども、野球をやっていたんだけれども、女子のソフトボールチームにどうしても参加をしてくれと言われて、仕方なく女子のソフトボールをやっていましたが、そんな小学校高学年時代です。

そして第二次性徴期、小学校高学年くらいになってくると、段々どうしても自分の体に違和感が出てくる、胸が膨らんできたりとか生理が来たりとかというのが耐えられなくて、中学に進学する前にはかなり悩んだそうです。当時の小学校の先生で非常に理解ある先生が、「中学に行って何かあったら相談においでよ」と言ってくれたのが救いだったというふうに本人が言ってました。

そして、中学に入ってセーラー服を着たのは、実は入学式の一枚だけしか写真がないそうです。やはり、私服で通える小学校時代と違って、制服じゃなければいけないセーラー服がどうしても耐えられなかったんです。部活も野球部に選手として入部をどうしてもしたいと言って野球部に入るんですが、中学校だとマネージャーとしてということでもそうなんですが、選手として男子生徒と一緒に野球部に入っているというと、女の

子たちからなんであいつは男の子と一緒に普段やっているんだというふうな形で、それが高じていじめられるようになってしまった。そして自分のどうしても性別の違和感というものを担任の先生にも伝えられずに学校には行かなくなったというふうに言っていました。中学時代は、ですのでほとんど中学校には行っていなかったというふうに言っています。

そして卒業の時に、当時の担任の先生だったそうなんですが、途中でいじめで転校をしてるんですが、転校先の担任の先生に卒業の時に初めてそれを打ち明けたんだそうです。なぜ学校に来れないのか、というのを自分の性別がこうだと思っている、セーラー服がどうしても着られないというのを伝えて、最後卒業式の時１日だけ学生服で写真を撮ってもらったというのがこの写真です。セーラー服の入学の時の写真と、この写真を比べると表情が全然違うんですよね。その先生に言われて嬉しかったのが、男とか女とかじゃなくて、君のことを一人の人間として付き合っていきたいと先生から言ってもらったのが非常に嬉しかったというふうなのが中学校卒業でした。

そして高校に入学するんですけれど、私、実は彼が入学した高校で教員をやっておりました。入学の時に、「富士宮の中学でオール１なんだけど、学校にはほとんど行けていないんだけれど、塾には私服で行って、非常に勉強ができる子がいる。男子で通えるなら高校に行きたいと言っている子がいるんだけど、そちらの高校を受験させてもらえますか」という相談がありまして、当時の校長先生が、今にして思うと英断だなあと思ったのですが、制服が男子で高校に来れるんだったら、それは認めていいじゃないかということで、男子の制服、男子の名前で入学を許可してもらえました。それが高校時代がこの写真（スライド）です。ただ周りの友達には本人は伝えたくないというのが希望だったもんですから、途中から段々やっぱり周りに嘘をついているというのが自分の中での葛藤になってきていました。

オール１なんですけれど塾に行ってたので、学力は非常にありました。クラスでも入試でもトップで入ってしまうと。オール１の生徒が入試でトップというのはちょっと学校でも話題になりましたけれど、要は実力はあったんですね。なので中学の先生が仮に制服は無理でもジャージで通えばいいよと言ってくれれば彼は中学に通えてましたし、それなりの成績で中学を卒業していたというふうに思っております。そういう意味で言うともったいないなと思ったのが私の率直な感想です。ただまあ、ジャージで通っていたら、出会うことなかったですから、それはどちらがいいかというのは難しいですけれ

ども、生徒会長まで務めて高校で活躍をしてくれました。

彼が一番、自分のセクシュアリティである意味切り替えられたのは、アメリカに２週間の語学研修に行ったんですけれども、その時に行ったホームステイ先や学校で本当に人種や性別がそれぞれの個性として当たり前に過ごしていた。左の写真の一番左の子は本人が言うにはトランスジェンダーの当事者で、それを全然オープンにして学校も受け入れて過ごしていたと。だから自分らしくいるというのが当たり前の社会なんだというのを感じて帰ってきたというふうに言っていました。

そして高校の卒業直前に、周りにどうしても嘘をついたまま卒業できないということで本人が悩みました。そして周りに言ってなかったことが、やっぱりこれは失敗だったなと思ったのは、どうしても知らない同級生はあいつ男なのか女なのかと思う訳ですよね。それで、ちょっとやんちゃな子が、じゃあ確かめると言って抱きついた訳ですよ。本人もやった方の子もまさかそうだとは思ってなかったと思いますが、あのそんな形で抱きつかれて胸を触られた時に触った方もびっくりした訳ですよ。男子だと思っていたのにと。それがきっかけで、高校にやっぱりなかなか通いきれなくなったと。生徒会長までやったんですけれど、卒業式直前の12月に学校を辞めるというちょっと残念な結果になりました。僕もその時、非常にいろんな相談を親御さんともしたんですが、12月に転校すれば通信制で３月に卒業できるから残りの単位だけ通信制でとって高校卒業して大学に行ったほうがいいということで12月に転校をして３月に卒業し、そして愛知県の大学に進学をしました。

大学も一人暮らしをはじめたものですから、最初のうちは非常に楽しそうに大学生活を送ってきました。ただ、どうしてもセクシュアリティに悩んでいる当事者の共通するところなんですけれど、メンタル的に非常にしんどくなる、うつ病の発症率は非常に高いです。もっと言えば、セクシャルマイノリティ当事者の自殺率は非常に高くて、内閣府でも自殺のハイリスク要因としてセクシュアリティを挙げている。彼も大学半年ぐらいした時にどうしても眠れなくなった。要は男性として振る舞っているけれど戸籍が女性のままで、将来就職したりというようなそういった将来展望が持てなくなったというのが一番の原因です。彼は結局入院をして、休学・退学というふうになってしまいました。

親に打ち明けられなかった理由。今、小学校でこういう授業をやっているか分からないですけれども、あなたが生まれた時お母さんはどう感じましたかという文章を親に書

いてもらう課題が当時あったそうです。その中に「お兄ちゃんがいて、二人目女の子が欲しいと思っていたから女の子と分かった瞬間に、お母さんはとても嬉しかった」というのが書いてあった。それがすごい印象に残ってるものですから、親に対して自分は女の子じゃなくて男だと思っているというのを伝えられなかった。そういう葛藤があった。まして一番近い家族だから、それを否定されたらもう生きていけないという、そんな悩みがあったということを後で本人は言っておりました。

ただ、うつ病で入院をして、その中で親御さんとじっくりいろんな話をしていく中で、お母さんが言った、僕の一番印象に残っている言葉ですけれども、「どんな形でも幸せでいてほしい。幸せで生きていてくれるのなら、男でも女でもお母さんはどっちでもいいと思う」というのを言ってもらって、性別的にも手術を受ける、それに対してお金も出してあげると。働いて将来返してくれればいいからと言って、お母さんが理解してくれた。そのことによって非常に救われたということです。必ずしもそういう当事者ばかりではないので、その辺では恵まれていたんだろうなと思います。

では将来どうやって生きていくかということを自分に相談を受けた時に、「自分は小中学校の時に相談できる場所がなかった。特に、東京ならいっぱいあるけれども、静岡というところはそういう相談をするのが難しい。そしたら中学生が一人で東京に行くというのは難しいから、地元でそういう活動をやりたい」というふうに本人が言いまして、それはとても良いことだねと思いながら、私もちょうど、タイミング的に退職をして大学で勉強し直したいと思ってた時期だったものですから、一緒にこの団体を始めました。

富士市では、ＬＧＢＴ成人式を１月に開催していただいています。非常に富士市は東部の中では先進的な自治体だと思っています。パートナーシップ制度も県内で４つしかまだ自治体でやっていないですが、富士市はパートナーシップ制度も導入をしていただいております。そんな中、私たちがいろんな相談を受けている中で、特別な存在じゃないんだと。いろんな人の多様な生き方というのをお互いに尊重し合うということは、そんなに難しいことじゃないんじゃないのかな。それを変えられるような取り組みをしていただけたらな。

私たち今いろんな相談を受けてきていますが、その中でこの機会ですので、知事に是非伝えておきたいと、昨日、本人と話をして３つほどありました。静岡県はパートナーシップ制度を導入するというふうなことが報道されていました。先ほど言いましたけれども、４市しか自治体で導入してないですから、それ以外の自治体の人たちは対象にな

っていない訳ですよね。まして、すごく小さな町なんかだと町独自で導入するのは難しいです。そういう意味でいうと、静岡県全体でそういう制度を認めてくれるというのは非常にありがたいことですし、全国でもそういう都道府県が増えている。その中で静岡が取り組んでいただけているというのは、非常にありがたいなと思っています。そして、ただパートナーシップ制度を認めればいいということではなくて、利用できるのはオープンにできる人しか利用できない訳ですよね。だけれども、その制度があることによって、富士市、あるいは静岡県はそういう自分の生き方を肯定してくれているんだというメッセージは、私は非常に大きいものだと思っています。生きづらさを解消する方法として、是非取り組んでいっていただけたらありがたいなと。

それでもう一つは、本人の経験の中で中学の先生の理解がもうちょっとあればすごく過ごしやすかった。そういう意味で言うと学校の中での取り組みというのは、私は非常に大事だと思っています。自分自身が教員だったこともありますので、私たちの団体では学校現場での啓発活動・研修に力を入れています。先日も富士宮のある中学校さんに行ってきました。けれども先生たちは無理解な訳じゃないんですよ。悪意があって認めてない訳じゃないんです。ただ、どういうふうに接するのがいいのか、なかなか戸惑っているというのが現状だと思います。そのことで子どもが通いやすい学校になるというのは非常に必要なことかなと思っています。

一昨年、三重県で非常に興味深い調査をやっています。三重県と宝塚大学の先生が共同でやったんですけど、三重県内の高校生90数パーセントのほとんどの高校生に対して、セクシュアリティに対してのアンケート調査をしました。そしてその結果、他の調査と同じように一定数は当事者であると認識している生徒がいると。その調査の意味があるのは、それだけではなくて、その当事者の生徒が例えば自傷行為をしたことがあるとか、あるいはいじめに遭った経験があるとか、将来に対して希望を持てているとかそういういろんな調査をしていくと、当事者である生徒のほうが、例えば「将来に対して希望を持てない」、「学校に対して居場所を感じられない」そういうふうなネガティブな結果が出てきている。それは私たちは非常に大きなことだなと。実は静岡県でも、もしそういう取り組みができるのであれば、その大学では是非提案したいというふうにおっしゃっていたので、静岡県の高校生がセクシャルマイノリティ当事者の生徒たちがどのような思いを持っているかというのは、県として行政として把握をしていただくというのは非常に嬉しいことかなと思います。

もう一点は医療に関してです。トランスジェンダー当事者の相談の一番大きいのは、どこに行ったら診断書がもらえるか、どこに行ったら治療が受けられるかという相談が非常に多いです。静岡県東部だけでなくて県内から。残念ながら今は静岡県内には専門の診断をしてくれるお医者さんがいません。大体、東京・神奈川、西の方の子だと愛知の病院を紹介をしています。でも、もし静岡市内で、静岡県内でそんな病院があると非常に嬉しいなというのが当事者の思いです。なかなか医療のことですから難しいですけれども、何年か前までは静岡市内の病院にいらっしゃったんですが、その方は開業されて東京に行ってしまったので、そういう医療へのアクセス、あるいは災害の時にホルモン注射をしてもらえるところがどこにあるのかとか、そういったところというのは、必要な取り組みかなというふうに思っています。

最後に、これは（会場のスライドに表示した画像）、県社協の方でふれあい基金というものをもらって、作らせてもらったポスターです。作ってくれたのは、当事者の高校生の女の子です。イラストを作ってくれました。ここにはあえてＬＧＢＴという言葉を入れてません。必ずしもセクシュアリティだけではなくて、例えば外国ルーツの子どもだとか、障害を持っている人だとかあるいは複雑な家庭環境にある子どもだとかいろんな人たちの生き方を尊重できる。そんな街であってほしいなというのが私たちの共通する思いです。以上すみません。拙い報告でした。ありがとうございました。

【発言者４】　初めまして。お話がうまくできないかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私は富士自然観察の会に所属して、富士山南麓で活動しています。こういう活動に関わるようになって22年になりますが、特に子どもたちとの活動が自分の活動の原動力になっていて、身近な自然と親しむ活動を通して、地域の自然環境や人を好きになってほしいというのが今の活動につながっています。近年、都会に行ってしまう若者も多いので、自分の育った地域の素晴らしさを知って好きになってほしいのと、たとえ都会に行ったとしても、心のよりどころであってほしい、そんな願いを込めて富士山南麓で身近な自然の豊かさを伝える活動を仲間たちとしています。

富士自然観察の会は、設立が1985年で世帯で加入するのですが、当時は28世帯でスタートしました。現在、155世帯の会員さんがいます。年間に観察会を40回以上行ったり、浮島ヶ原自然公園というところのガイドも行っています。運営委員が30名ほどいて、そ

れぞれ植物、植物でもいろいろあって樹木、花、コケ、昆虫、キノコ、星座、岩石、自然遊び、自然クラフト、食べられる野草など、得意分野で活躍しています。そのため、それだけ沢山の観察会が行えています。また運営委員さんと一緒に、会員さんも自主的に研究や保全活動などで活躍してくれて、学び合い、良い関係を作り上げています。

さらに富士市との協力として、富士市環境アドバイザー制度というものがございます。この制度は地域の方が集まる勉強会や講演会の講師、自然観察活動の指導者や学校での総合学習の講師など、派遣依頼に応じてアドバイザーを派遣する事業です。会への依頼はコロナの影響もあって、少し中止になったこともあるんですけれど、令和３年度は67回、受講者数が2,738名にも上がりました。幼稚園から高校まで、また町内の集まりなど自然観察や自然遊び、最近幼稚園では観察に絡めてＳＤＧｓに関してもやってくださいということがありますので、分かりやすくお伝えすることもあります。

学校や幼稚園もそうなんですが、子どもエコクラブの活動もしています。今日、私すごく嬉しかったのは、自分も子どもエコクラブの原田湧水クラブってとこをやっているんですが、そのＯＢの青年が職員さんでいらして、声を掛けてくださってすごく嬉しくて、立派になってありがとうございます。子どもエコクラブの活動も応援しています。子どもエコクラブというのは全国規模のクラブで、環境省が作った子どもたちが地域の中で、主体的に行う環境保全活動や環境学習を行うクラブです。現在富士市には12個のクラブがありまして、860名の子どもたちが活動しています。私たちも一緒に活動することも多いので、活動する時の年齢幅が２歳から92歳で、すごい幅でやっているんですよね。

年がら年中やらせていただいているんですが、それには富士市の各部署さんが連携をとって対応してくれているので、私たちも活動しやすいです。もちろん県の事業にも参加しています。

(会場内のスライドを見ながら)すごいきれいな写真なんですけど、富士市は海抜０ｍから富士山の中腹までを市域に持ち、標高ごとの自然を楽しめる素晴らしい環境にあると思っています。また、頂上に登らなくても、ちょっと車を走らせていけば富士山の自然を楽しめる観光化の色が強すぎない豊かな自然が沢山あって、すごくいいなと思っています。

自分たちの身近なところでは、富士山の側火山のこのブナ林の観察会。いいですよね。ブナの木に登ったりしています。また、宝永山まで樹林帯を歩くコースもすごくいいで

す。これは子どもエコクラブ全体で行きました。この時、バス２台で60名ぐらい行ったんですけれど、職員さんたちが16名も来てくださって、サポートしてくださって、今思えばすごいな、ありがたいなと思っています。

自分たちが住んでいる側の自然もそうで、富士山の魅力を富士市民でなく、全県の方々にも親しんでもらえるよう、そんな機会を広げていければなと思います。これ(スライド)は地域の湧水の川の勉強会をしているところです。

話が前後しますが、富士市に子どもエコクラブが12個あるんですけれど、１年間の活動をまとめた壁新聞を年末に作ります。先日、この発表をするにあたって、今まで子どもたちが書いた壁新聞を見てみたら、もっといろいろ沢山見てみたんですけど、ほとんどのクラブが富士山の絵とか、富士山のことについて書いてありました。それだけ体の中に富士山というのは自分たちの生活の中に染み込んでいるんだなというのが、実感として感じられました。

この壁新聞が県の代表として選ばれると、全国フェスティバルというものに出場できます。エコクラブの甲子園みたいなものですね。それで、富士市のエコクラブが結構それに参加しています。私も何回か見に行ったんですけれど、全国フェスティバルで全国の皆さんの前で富士山の恵みとか身近な自然について、もうすごく誇りを持って伝えている、堂々と発表している姿を何度も目にして、その頑張りようが鳥肌が立つぐらいみんな立派なんですよね。それだけ子どもたちの心に地元愛というか、富士山というものが染み込んでいるのかなと思いました。

これからもそんな場をどんどん作っていきたいと思っています。子どもたちの力は本当に偉大で、最近では観察会でスタッフ側の考え方や立場になって、「お手伝いすることありませんか」とか言ってくれる子どももいます。私たちがガイドをしている浮島ヶ原自然公園というところがあるんですけれど、皆さんサワトラノオという植物を知っていますかね。これは全国に数か所しか生息していない絶滅危惧種の花なんですけど、私たちもいろんな保全活動をしている中で、毎年３月にその植物の芽だし調査をしています。それで、この植物は生息地は全国で数か所しかないんですけれど、いずれの場所でも数が少ないんです。でもここの公園では目の前で見られて、調査では毎年2,000株が確認されています。その調査に参加したり、観察会に参加している子どもたちが、保全活動を一生懸命やってくれたりしています。さらにその中から、この植物、この公園の素晴らしさをみんなにガイドしてみたいということが自主的に意見が出て、そのサワト

ラノオの観察会ではガイドをしてくれたり、他の場所でも活躍する姿が最近見られて、とても嬉しく思っています。

市民の方たちも観察会はもちろんなんですけれど、最近は外来種駆除とか海岸清掃なども参加者が多くなっていて、とても私たちの励みになっています。若い人たちもいろいろ参加してくれたり、やはり親子さんだと、やっぱり今までこういうことに携わって来なかったんですけど、これをきっかけにいろんな他の観察会とか、保全活動にも参加してくれる方たちが少しずつ増えてきています。回数を重ねていくことで、さらに広がっていけばいいなと思っています。

最後になります。ちょっといろいろ上手にできなくて申し訳なかったんですけれど、かつて子どもエコクラブの活動に参加してくれた親子さんが、こんなことを話してくれました。こちらはお母さんです。「自然や環境について、関心がなかったけど見方が変わりました。人と人との繋がりの温かさを感じ、これからも長く活動を続けてほしいと思います」こちらは子どもさんです。「知らない大人(自分の親以外の大人)と話すことって、すごく勇気がいることだったんだけど、自分をいっぱい褒めてくれるのでとっても嬉しかった」ということです。社会人の方からも「様々な方向から考えて答えを導き出すこと。普段生活の中で何かにぶつかった時も何か違う方法があるんじゃないかと前向きに考えられたこと。コロナの時に自宅でこもっている時に発想の転換ができました」なんてことをお手紙でいただきました。ちょっと前には、小学校１年生のお子さんなんですけれど「自然観察会の人たちと毎日会いたいと七夕の短冊に書いていました」なんてお母さんから写メが送られてきて、こういう素朴なのが嬉しくて、涙がこぼれそうになりました。それで、(スライドの)この左の写真は、初代会長さんと未来の会長です。ご清聴ありがとうございました。

【川勝知事】　おふたりの話に共通しているのは教育ですね。知らないこともありまして、深く心に染みたお話でございました。

まず発言者３さんのお話ですけれども、今、このＬＧＢＴという言葉がよく使われるようになりました。レスビアンだとかゲイだとか、それから、バイセクシャルとかトランスジェンダーと。少なくとも13人に１人がいらっしゃると。それを告白するＡ氏のようにそういう人で統計されているのではないかというふうに思いますので、もっといらっしゃる可能性もあるということですね。それで、言えないから苦しんでいると。体は、

男と女でこれはセックスとして言われますけど、これは体の性で、もう一つ心の性というのがあって、身体は女性の体をしているけれども、心はもう完璧に男の子の考えを持っている。生まれつき持っている。そのように自分も思っていると。こういう人たちがいて、Ａ氏の場合には、実に優秀なんですね。子どもとして生まれてきて、しかし小学校の時にそれに気づいて、中学校、高校、大学、本当に苦しんで、しかしながら小学校の時の先生、中学校の時の先生、高校において発言者３さんに会われて、これが運命の出会いとなって救われたと。しかしながら、社会の偏見が非常に強い中で、静岡県35市町の中で今４市が導入してると思いますけれども、パートナーシップ制度の導入を富士市は率先してなさった訳ですね。ですから正式にそれを認めるということをしたと。それで、私どももそれに啓発される形になっております。したがって、発言者３さんがおっしゃったようにいろいろな偏見もあるし、知らせなくちゃいけない、知らなくちゃいけないことがあるということで、今日のお話は誰にも聞くに値する話だったんじゃないかと。360万人の中で、思春期頃の聞く耳を持つ方たちは、聞けば分かる人たちばっかりですよ。ですからそういう人たちを増やしていかなければいけないので、しかしながら、できれば令和４年でですけれど、富士市にならって導入いたしまして、そして、静岡県の事務所がございます、静岡と浜松とあと沼津になりますかね。そういうところで、パートナーの方が堂々とそれを宣誓して社会がそれを受け入れられるように、あるいはそれまでもいろいろな啓蒙活動、あるいは啓発活動といいますか、をして参って、Ｒａｉｎｂｏｗ ＤｏｏＲさんのご活躍などにも富士市とともに後押しをしていきたいと。

それで一番困られている問題の一つが、お医者様との関係。病気になったり、手術をしたりする時に診断書を書いてもらうには何をどうしたらいいかという、これはなんとしても早く解消しなくてはいけないので、お医者様にもそういうご理解をしていただくことが大事なので、医師会や病院協会などにこうした点を共有していただいて、どなたも苦しまないで生きられるようにしなくてはいけない。今日も岩松小学校に行きましたが、そこに特別支援の子が大体２～30名いらっしゃるんですね。今日も一人来ていました。それで、13人に１人以下ですよ。それから外国人の方の子どもも学校にいました。それも13人に１人よりもっともっと少ないですよ。だけれども皆一緒にやろうじゃないかというのが岩松小学校の学校の方針ですよ。私もあなたもみんな大切というそういうふうにうたっている訳ですね。ですから、ここは新しい教育が生まれる場所じゃないか

と。そもそも今の首相は高校は開成ではないでしょうか。それからこちらの長泉の(静岡がんセンター)総長も開成じゃないでしょうか。それからお隣の山梨県の知事さんも開成高校ではないでしょうか。開成が皆今日、非常に優秀な方を生んでいるのですが、その開成は誰が作ったんでしょうか。佐野鼎(さのかなえ)さんです。明治７年にこれからの時代教育が必要だということで、自ら共立(きょうりゅう)という学校を作られた訳ですね。さすがにそのことを市長さん、教育委員会は知っておられて、駅前に像を立てられました。これはですね、彼は1860年、日本が一番最初に勝海舟が海を渡って向こうに行きますけれども、その時に一緒に行かれている訳ですね。そして行った人がいる訳ですよ。福沢諭吉も行ってる訳ですけども。向こうのものを吸収する能力、向こうの人がすごく長けていると言ったのが、この富士市が生んだ、佐野鼎先生だった訳です。彼はその後、加賀藩に召し抱えられ、そして、明治７年にこれからの時代新しいものを吸収しなくてはいけないということで建てられて、やがて大蔵大臣になる高橋是清がそれを引き継いで、ご本人自身は40代で生を終えられたという。しかし志を築いた人がいた訳ですよ。それが開成ですから。この一番最初のことをやったのが、富士市の生んだ人間だったと。

それから発言者４さんのお話は、これは先生を22年間やってこられたと。そして、この富士自然観察の会というのは、これはもう文字通り自然を楽しみ体を鍛えながら学習している訳ですね。いくつものジャンルに分けながら、お花を勉強したり樹木を勉強したり、それから自然で様々なものを専門家の方たちが、子どもたちのためにやっていると。おそらく、地域の子どもエコクラブというのは、富士自然観察の会を真似たのではないですか。国の方もそれをやっているということですね。しかしこちらのものは、地についてるのじゃないでしょうか。ですから、私はこういう地域の人たちが地域ぐるみで子どもたちを楽しくさせながら、結果的に教育して郷土を愛するようにしていらっしゃる訳ですね。最後子どもが短冊に毎日会いたいとか、それからお父さんお母さん以外大人と最初話をするのが怖かったけれども、それが楽しみになったとか、逆に今までの教育しか受けて来られなかったお母さんは、子どもに教えられて啓発されているということで。ですから地域ぐるみの教育が行われているなと。

一方で、もちろん義務教育としてこの日本が大事にしている小学校、中学校の子どもたちへの教育は、やることはやらなくてはいけませんが、それだけでは不十分と。むしろ自分たちの生きているところについて学んでみると、学校で学ぶよりはるかに関心が

湧き、そして重要なことを学ぶということではないでしょうか。今日はこちらにお花が飾られていますけれども、昨日、移動知事室で東部地域局長の部屋に行ったら、キキョウが生けてあったんです。別の幹部の話に聞くとフジバカマが生けてあったんですよ。あ、そうか。秋の七草を川勝に教えているなと。オミナエシ、クズ、ハギ、キキョウ、フジバカマ、ススキ、ナデシコ秋の七草じゃないですか。これを、近くで摘んできたか、あるいはお花屋さんから選んで、それでその季節が今秋になりましたということを僕は東部地域局長から教えてもらった訳です。やるなぁなんて思って。それからこちらの番茶というかほうじ茶ですね。これもこちらの売りになっているということでいただきまして。ですから地域のことを知って、また季節を知って、それを相手に偉そうに伝えるのではなくて自然に分かるようにしていると。子どもに自然に楽しませながら教育をして富士学ですね。私は富士山と名の付く山が北は北海道、南は沖縄にいたるまで、利尻富士だとか蝦夷富士とか津軽富士や南部小富士だとか薩摩富士とか、沖縄の本部富士とかですね、400くらいある訳ですよ。日本はふじのくになんですけれども、富士自然観察の会というのは、日本の自然観察の会の大元締めじゃないですかね。そういうお花もですね、バラといってもいろいろと違うように、お花に個性があるように、一つ一つ一人一人、皆個性を持って生まれてきて、そしてそれを大切に皆がしてくれて、一緒に一生を終えていくということが望ましいし、そうありたいと。それは私はそういうことを静岡県のこの富士を中心にやっているんだということを発信するのが、日本の文化首都としても使命になるなということをお話を聞きながら感じましたね。

ですから自然の多様性、それから人々の多様性、文化の多様性、こうしたのもハーモニーでなくちゃいかんということを富士山は教えてくれると。登る道はいくつもあると。しかし富士山の姿は一つです。相和しているので。しかも和は平均じゃなくて１と２の和は３と。３と４の和は７と、３と４もその中にあるから全部一つずつ全部入れて、全体が大きく和していると。大きく和すと書いて、大和(だいわ)ですから。大和(だいわ)を訓読みすれば大和(やまと)ですから。日本のことです。それを教えてくれるのが富士山だということになれば富士市で行われて急速に発信力が出てきた感じがいたします。昨日今日で、小林製作所でも、レバンテフジ静岡のサイクルステーションでも岩松小学校でも、ですからかりがね精神ですね。そういうものがちゃんと受け継がれている。なにしろ岩松小学校というのは共立学校よりも１年早いんですよ。明治６年ですから。1873年の創立です。したがって、来年は150年なんですよ。すごい学校ですね。それが

大きくなっているんです。どうしてかというと移住者が増えてるからですね。だからこれはすごいメッセージではないかと思いまして。来年はサイクリングもやられるということですが、ともかく、一人一人を大切にするということの大切さを発言者３さんから教えていただいて、Ａさんは一人じゃないんですよと。君は一人じゃないと。発言者３さんという人がいるじゃないかと。発言者３さんの話を聞いて、そうだったのかという方がほとんど大半だと思いますね。それからまた発言者４さんの話を聞いて、そうか。やっぱりそういうのはうちでもやっていった方がいいなとか、あるいは参加してみようかとか、子どもがいるならその子どもを自然観察の会に入れてみようとか、なにしろどんどん増えてきた訳じゃないですか。最初28世帯が150いくつになって、５倍以上になった訳ですから。ですから増えてるんですよね。そういう訳で追い風が吹いているなぁと。小長井市長一緒に聴いていて良かったですね。しかも県議の方も４人来て一緒に聴いているので、これは県にとってもすごくいい話になったのではないかというふうに思いました。またやるべき課題は発言者３さんから聞いて分かりましたので、そうしたことを我々はできる限り手伝っていって、富士市のパートナーシップ制度の導入もこれをやってみたいというふうに、これから皆さんとご相談をしながらなるべく早く実行したいと思う次第であります。ありがとうございました。

【質問者１】　富士市に住んでおりまして、１点お伺いしたいと思います。やはり子どもが外に出ていってしまう、またまだオンラインが進んでいるとはいえ、一極集中で東京に出ていってしまう、いろんなところに出ていってしまうという状況ですけれども、その中で富士市というものが、静岡県でどうやって若者が残ってコミュニティを作っていくのかということが、もし県知事に何かご意見やお考えがあったら教えていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【川勝知事】　富士山を見れば、外に出てみようかと思うのが私は富士市民じゃないかと思いますね。しかし富士があれば十分だというからここにいようという人もいると思うんですよ。ですから日本一の富士山を見ながら育ったから外を見てみようと思う、そういう青年をおそらく富士の人たちは行ってみておいでと言うんじゃないでしょうか。残念ながら、そういう人の数が多くて戻ってくる人は少ない。しかし戻らせるためには魅力が必要です。今「30歳になったら静岡県！」というのを静岡はやっておりまして、

ずっとやっていて、30代ですね。終の棲家が静岡県というのが昔多かったんですけど、気候が温暖で食べ物も美味しい、景色もきれいだと。今30代前後が来ているでしょう。それから高校を卒業するすべての青年にカードを渡しています。パスポートです。そこにＱＲコードが埋め込まれていまして、高校卒業する時に、ほとんど大学に行く時に出る人が多いんですよ。高校を卒業して大学で今東京の方に行ったり、名古屋の方に行ったりされる方は、ほとんど地元のことを知らないですよね。学校のクラブとか地域の一部のことしか知らない。どんな企業があってどんな地域性を持っているのかというのはほとんど知りません。ですからそれを知らせるためにやっている訳です。それから静岡県から行っている学校と就職協定というのを結んで、そして静岡県の情報をうちの情報がそこに出るので、静岡で働いてみたいという人が出てくるかも知らんということで、出る人を止めない。しかし、戻ってきたい人あるいは先ほど発言者１さんがおっしゃったよそ者ですね。そういう人たちがここは街道筋ですからね。いろんな人が往来するので、そこでわらじ脱いで、ここで生活しようという人がもっともっと多くなって皆がわらじを置けばそこは都になりますから。いろんな人がいて、それが都ですね。そこの人しかいないとなると、ちょっとまだ都性というか普遍性とかに欠けると思うんですよ。ですからいろんな人が来れるような仕掛けができていくと、「30歳になったら静岡県！」、これが今働き方改革で終身雇用が崩れつつありますから、転職をするということを前提にして30歳になったら静岡県！運動を数年やってきたら、それが2020年の移住希望地ランキングでは、コロナにも助けられてこちらが実は１番です。２番が山梨県、３位が長野県です。ですから、出てきてるんですね。ですから私は東京経験したり、海外を経験するとかいうふうにしたいという青年を行っておいでと。おそらく富士の行政もそういう広い根性を持っているでしょう。こういう学校や発言者１さんがやっている団体など新しい働き方、小長井市長が言っていましたよ。働く場所を変えなくてよい自由というのがテレワークでできると。それを目指している。だから東京で働いている会社を変えなくてもこちらに来て、仕事ができると。そういう市になるということで、来る者は拒まない、努力は惜しまない、見返りは求めないと、私の考えとまったく一緒だなというふうに思っているわけです。ちょっと取り留めのない話となりましたけれども、引き留めるためにお金を出したりする人もいますけれども、私は情報を差し上げて選択する主体性は青年たちに委ねたいと考えております。ただ戻って来るための措置を30歳になったら静岡県！運動をやるとか、山梨県と長野県と一緒になって、選ぶ人は首都圏の人で

すから、その人たちが選ぶ選択肢を大きくしてうちを選んでくれればもっとよいということで、競争はしない。こういう個性があるところですよというような形で、そして高校生には情報を提供するシステムをこれでもう４、５年になりますから。大学を卒業する頃の青年たちが静岡県の情報をずっとこの４年間、５年間持ち続けていますので戻ってくる人は確実に増えていくと。このように確信をしております。ありがとうございました。